

【2015/7/22 経済学部ワークショップの様様】

《ワークショップ ReD》

沖縄をめぐるドキュメンタリーとメディア・リテラシー

ジャーナリスト 土江真樹子

ワークショップ ReD [Rethinking excessively for Documentation] の第3回目は、ジャーナリストの土江真樹子氏を講師に迎え、「沖縄（戦争）ドキュメンタリーとメディアリテラシー」と題して開催した。第1回目では辺野古での新基地建設への反対運動を取り上げ、2回目でも沖縄のハンセン病療養所（沖縄愛楽園）とその開園者に関する議論があった。はからずも沖縄が継続的なテーマとなっているが、これは沖縄戦による多大な犠牲や、現在辺野古が最大の焦点となっている基地問題、そして日本における沖縄への長きにわたる構造的差別といった、相互に関連しあう「問題系」が沖縄に存在しており、それらがこの国の戦後70年間の平和主義とは、民主主義とは、地方自治とは一体何であったのかという根本的な問いを突きつけているからにほかならない。



さらに、今年は沖縄について、良質なドキュメンタリー映画や番組が数多く公開・放送されている。本土での沖縄への関心と理解は依然として不十分であり、自民党の「勉強会」出席議員や百田尚樹の暴言に象徴されるように、知らないことに基づく誤解、さらには意図的なデマが蔓延する状況にあるものの、こうしたドキュメンタリーを介して沖縄のリアルな問題を知る機会は確実に増えている。しかし、ドキュメンタリーを視聴する際には、それが現場の「真実」そのものではないことにも留意する必要がある。複雑で多様な「真実」のうち、ドキュメンタリーが何を切り取り、どのようなメッセージとともに伝えようとしているのか、視聴者である我々はその「受け止め方」—メディア・リテラシーに倣って言えばドキュメンタリー・リテラシー—を意識して、鍛えていく必要があるだろう。

講演の中で、土江氏は「現場の何を切り取ってみせるか」という点を考える上での素材として、三上智恵監督の「戦場ぬ止め（いくさばぬとどうみ）」（2015年7月公開作品）の予告編を最初に上映した。この作品は辺野古での新基地建設をめぐる現場に深刻な分断が引き起こされ、うちなんちゅー同士が対立し合う現実を伝えている。ここで、基地反対運動と警備側（辺野古のゲート前では民間警備会社（アルソック）および県警）の衝突を撮影する際、土江氏は「遠方にカメラを一台据えて俯瞰的に撮影し、あわせて衝突の内側を撮影できる位置にカメラを用意する」と述べた。これは、俯瞰的に撮ることで客観性・冷静さを保ちつつ、内側からの視点で衝突をリアルに捉えるためである。しかし、NHKの番組ではゲート前での衝突について、遠方から引いて撮った映像だけを用いており、これは衝突のリアルさを消去した上で、むしろ周囲の状況の中で衝突の「異質性」を際立たせるといふ、意図的な演出ではなかったかと指摘した。

続いて、「むかしむかし沖縄で」（沖縄テレビ、2005年OA）が上映された。この作品は、沖縄戦時に米軍の従軍カメラマンが撮影したフィルムを取り寄せて、そこに映っている人や場所を特定し、その本人に見てもらおうという活動に取り組む人物を追いかけたものである。これは、戦争を生きのびた人々を過去の自分や亡くなった家族・知人と再開させ、語り合わせる試みであり、そこには「生き残った人々は笑顔になっていい」というメッセージが込められている。そのため、この作品は「笑顔が多い沖縄戦ドキュメンタリー」となっており、「悲惨さ」を中心に据える傾向がある他の作品と比べて異質である。

土江氏は、こうした作品が制作された背景には、「戦後60年」という時間の流れがあると指摘する。すなわち、戦後50年目の年には沖縄戦の体験が生々しく、戦時中のフィルムについても泣きながら見る人が多く、とても「あそこに映っているのは私だ」と自ら名乗り出る雰囲気ではなかった（むしろこの年は、旧日本兵や米兵による証言が多かった）。しかし、60年目になると次第に体験が「記憶」となり、

フィルムを見ながら笑い、名乗り出ることができる人も増えていた。さらにこの年は戦争体験者の高齢化や、小泉内閣のもとでの国や社会の右傾化といった事態もあり、メディアが危機感を持って戦争の証言を記録しようとした年でもあった。

今年（2015年）は戦後70年目であるが、実際の証言を取れる最後の機会となる可能性が高いことから、土江氏によれば「いま取れるだけの証言や記録を取ろう」という意識がメディア側にあり、さらに沖縄戦を体系的に集大成し、戦死者数などを検証する動きも活発である（その一例がNHK「沖縄戦全記録」）。いっぽう、沖縄では安倍政権への不満・不安や、日本社会に対する危機感が今までになく高まっており、戦争についていま語らなければ、若い世代へ継承しなければという思いも強くなってきている。

6月23日の「慰霊の日」式典で、参列者から安倍首相に厳しい野次が飛んだのも、そうした不満や危機感の現れであった。この式典について、野次の音声を低くするなどの処理をして報道したNHKの姿勢には、未だに同局が沖縄とまともに向き合い得ていないことが如実に現れている。

最後に上映されたのは、「村と戦争」（東海テレビ、1995年OA）であった。この作品では、岐阜県東白川村で戦後50年に「戦時記念館」を作るという企画が持ち上がったことをうけて、元日本兵である住民が村に残る戦争の遺品を収集する姿を追っている。そして、次第に戦争に対する住民たちの記憶や思いが明らかになり、いつしか「戦時記念館」は「平和祈念館」と名前を変えて開館することになる。ここでは、戦後50年が過ぎても小さな村に大きな戦争の傷跡が残されていた事実とともに、村人たちが語れなかったこと、閉ざしておきたかったこと、伝えるべきこと、伝わらないこと…といった、それまでずっと心の中に埋まっていた戦争の記憶の複雑なカタチが浮かんでいる。

このほか討論では、現在の日本のメディアが抱える諸問題—たとえばテレビが「わかりやすさ」を過度に追求するあまり、本来複雑である事実を伝えられなくなりつつあることや、メディアが政権と接近し過ぎてむしろ取り込まれていることなど—、また沖縄戦をめぐる被害と加害の現実をより一層追求しながら、今後沖縄と本土がどのように向き合っていくべきかなどといった論点が提起された。たとえば、本土による被害を受け続ける沖縄にあって、戦時中には朝鮮半島出身者が被害を受けていた。現在、戦



争犠牲者の氏名を分け隔てなく刻銘するのが基本理念である「平和の礎」に、朝鮮半島出身者の名は2010年段階で447人しか刻まれておらず（沖縄県営平和祈念公園 HP より）、しかもそこには女性の名前が1人も含まれていない。土江氏は、こうした事実を直視する必要性を訴えるとともに、それをめぐるメディアの報道姿勢に疑問を投げかけた。フロアからはこれと関わって、広島大学の崔真碩による「影の東アジア—沖縄、台湾、そして朝鮮」という文章（『朝鮮人はあなたに呼びかけている—ヘイトスピーチを越えて』彩流社、2014 所収）が紹介されるなど、意見が取り交わされた。我々はこれをとても複雑で切実な問題として受け止め、さらに丹念で継続的な議論を行っていこうと考えている。（文責：青柳周一）